

神様に守られて

東 谷 誠

奨励者紹介〔ひがしたに・まこと〕

日本キリスト教団部落解放センター運営委員長

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

(ヨハネによる福音書 3章16節)

私は日本キリスト教団部落解放センター運営委員長の東谷誠と申します。部落解放センターは、日本の社会、特にキリスト教社会の内、外に「部落差別がなくなりますように、すべての差別がなくなりますように」と願ってさまざまな取り組みをしています。昔は、日本には3000部落300万人の被差別部落の人がいると言われました。被差別部落に生まれた人は、間違った考えや、分からないのに確たる証拠もないのに「あそこはなー」などと言われて、さも被差別部落に問題があるかのように伝えられていきました。そして被差別部落に生まれた人は差別され、結婚、就職などの時には「差別事件」が起こります。二人は一緒にになりたいと願っても親や親戚が反対する。就職の時に出身者を採用しない。悲しい、苦しいことが実際起こります。

A君の話

A君はこう言います。「不動産屋に就職しました。先輩と生駒山にドライブしている時、先輩が『あそこなー被差別部落なんや。土地の値段は安いけど恐いとこやねん』と言いました。『何を言ってるんですか』と言いたかったけど自分が出身とばれるから言うのをやめた。でも、その後ずっと、何で言わなかったと後悔している。そして店にいても、お客が来て『この土地大丈夫やな、被差別部落違うな』と私に問いかけます。先輩はすぐに大丈夫です、と答える。私は答える気になりません。被差別部落やったら大丈夫でないのか。来たことあるのか。ムカムカしてきます。しかし先輩は、どうして『大丈夫』と言わないのか、と私を怒ります。どうしても我慢できずに仕事を辞めました。いっぱい言いたかったけど何も言わずに辞めました。後悔している」と言います。

B君の話

B君は、今大学に親しい友人が6人いる。その6人にもっと自分のことを分かってほしいので立場宣言(部落民宣言)をしようと思うんだけど、なかなか言えなくて。言ったら今の仲間が壊れるかもしれない。怖くて怖くて言えない、と言います。

C君の話

C君はこう言います。この前じいちゃんが俺に「来年の3月に大学卒業するな。就職な一遠い所にし。お

前がかわいいから、言うのやで。お前がかわいいから言うのやで。この町におったらあかん。この町におったら差別を受けて悲しいことに出くわす。お前が差別されて、悲しい、苦しいことに出合ったらと思うと、たまらん。じいちゃんらはええからお前は遠い所へ行って生活し。二度と帰ってきたらあかんでー」と言ったので、俺はじいちゃんに「じいちゃん何を言ってるん。俺はこの町が好きや。仲間もおるし。心配せんでええ。差別するのは差別するやつが悪いので俺らが悪いのと違う。負けへんで。今まで解放教育も受けてきたし、仲間もいる。じいちゃん、もう遠くへ行けとか言わんといてや」と言った。じいちゃん喜んでた。

こんな話はいっぱいある。今も差別がある。

差別されることのない人々がなぜ差別されてきたのか

では、なぜ被差別部落に生まれた人々は差別されてきたのでしょうか。日本には3000部落あると言われていますが起源はさまざまです。生まれた年代も違います。差別された理由も違います。だから分かりづらいです。差別している人に、あなたはどのように差別しているのですかと聞いてもほとんどの人は答えられない。おばあちゃんが「あそこに住む人は私たちと違う」と言っていた、などと言います。

簡単に言いますとこれがすべてではありませんが、たとえば、農業中心の社会の中で、造園業や芸能に携わった人々が差別されていきました。室町時代、銀閣寺の庭園造りをした人々が差別されていました。同じ室町時代、能に携わった人も差別されていました。今の時代にあっては何も差別されることのないことがその時代に差別されました。また、血にかかわることは穢れていると言って、食肉の仕事、靴などを造る皮革産業に携わる人々が差別されていました。その人たちがいなければ日常生活が大変困るのに、間違った教え、考え方によって差別されていき、今は理由も分からず差別だけが残し、悲しい出来事が起こっています。

神様に守られて

私は大阪の南の方の大きな被差別部落に生まれ育ちました。私の生まれた家の前に教会があり、教会の幼稚園がありました。私はその幼稚園に行き、教会学校に行き、60年間教会に行っています。私は5歳の時教会へ行き、ずっとつながっている。このことは私にとって、とても良かったことです。悲しい時、困った時、嬉しいことがあった時、病気になった時、入学試験に落ちた時、受かった時、彼女ができた時、子どもが与えられた時、母が亡くなった時、いつも教会へ行き、礼拝堂で祈り、ボーっとしています。たまには大きな声で賛美歌を歌います。たまには牧師が来て、一緒に祈ってくれます。15分で帰る時もあります。2時間ぐらいいる時もあります。心が安らぎます。私のためにイエス様は十字架にかかってくださりよみがえって今、私のそばにおられる。神様は私を愛し、守ってくださると実感します。心が安らぎます。

私は1人目の子どもが与えられた時、教会で祈りました。「神様、私に子どもを与えてくださり感謝します。本当に嬉しいです。ありがとうございます。この子が差別されることがありませんように。どうかこの子が結婚するまでに部落差別がなくなりますようにお願いします。イエス＝キリスト様の御名をとおしてお祈りします」と祈りました。それから、私は一生懸命部落解放の取り組みをするようになりました。その子の結婚が決まった時、教会へ行き祈りました。「神様、子どもによきパートナーが与えられて、結婚することになりました。ありがとうございます。どうか子どもたち二人を祝福してください。お願いします。それと、神様どうか、

二人の結婚に際して何もありませんように。差別事件が起こりませんよう。願わくばみんなに祝福されますように」と祈りました。あれから40年、被差別部落のみんなの取り組み、国の支援などにより40年前と比べるとかなり差別がなくなってきました。しかし今も差別はあります。今、私は何ができるのだろうかと考え、私の生まれたふるさとで行っていること、これからもしていこうと思っていることがあります。町の若い人と出会い、話を聞き、安らぎを与えることができないか。そして、できれば、できればです。一緒に祈れないかと思います。

切なる願い

いつの日か必ず差別のない平和な世の中がやってきますようにと信じます。

最後に。差別事件が起こるのは、差別される方に問題があるのではなく差別する側に問題があるので。「差別を受けていた人々も差別から解放される。差別をしていた人々も差別意識から解放される」、そのような社会を願います。

もう一つ、将来パートナーと出会い一生一緒にいたいと決める時、被差別部落出身だとか在日だとか、国籍が違うとか、肌の色が違うとか同性だとか気にせず、自分が愛しているこの人と一生一緒にいたいと自分の気持ちで決めてください。

2016年10月19日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録